

文艺和寒

第55号

和寒町公民館

発刊に寄せて

和寒町公民館館長 松村辰彦

春の訪れを感じる季節となりました。今年も多くの方々からのご寄稿を賜り、町民の皆様にも親しまれております。「文芸和寒」第五十五号を発刊することができました。

昭和四十七年の創刊以来、この文芸誌は町民の皆様から俳句、短歌、随筆、感想文など幅広い作品をお寄せいただき、和寒町の文化活動の一翼を担ってまいりました。今年も文芸誌として充実した内容になりましたことに、心より嬉しく思っております。

近年、情報通信技術はさらに高度なものとなり、生成AIをはじめとする技術の進歩は目覚ましく、瞬時に整った言葉が生み出される時代となりました。しかし、効率や合理性が優先される世の中だからこそ、自らの心を見つめ、推敲を重ねて生み出された言葉の価値は、かつてないほど高まっていると感じています。

本誌に掲載された作品には、デジタル技術では書ききれない、筆者が日々の暮らしの中で捉えた瑞々しい感性が宿っています。こうした人間味あふれる表現の積み重ねこそが、地域の文化を形作り、次世代へと繋ぐ大切な財産となると信じております。

今後も本誌が創作意欲を育み、寄稿者と読者をつなぐ文化活動の一環として発展していくことを願っております。

最後に、寄稿いただきました皆様、そして編集に携わってくださった皆様に感謝申し上げ、発刊に寄せる言葉とさせていただきます。

目次

【随想】

ゆうさんの諸国漫遊記【五】

西村 雄一…1

本に親しむ

清水目 サダ子…10

【短歌】

己 明田 しず香…12

心明るく 清水目 サダ子…13

過去の日々たち

西澤 和子…14

プロ並みの 井上 香代子…15

道程 大森 セツ子…16

感謝 小原 孟庵…17

歌生まむ思い 菊地 美智子…18

追憶 鈴木 露子…19

農の道

毛糸の手袋

驚見 紀子…20

高数後 法子…21

高橋 範明…22

竹ノ内 ひかる…23

春のかおり 土井 一光…24

女性総理 丹羽 泰子…25

猫 牧 あづさ…26

つつましく生きる日々 山中 千代子…27

斎藤茂吉記念

第32回中川町短歌フェスティバル

(佳作) 青木 優晏…28

(佳作) 合田 真…28

第20回

北海道小・中・高校生短歌コンテスト

(優秀賞)

井上 栞那…29

(入選)

山口 莉生…29

(二次審査通過)

保土澤 舞音…29

動物と人間の付き合い方

(優良賞)

今北 悠太…37

【俳句】

鰯雲

菅野 彰夫…30

【税の作文】

(名寄地方農政貯蓄組合連合会 会長賞)

生活を支える大切な仕組み

菊地 晃也…40

(名寄地方納税貯蓄組合連合会 優秀賞)

もし、税金が無くなったら

遠山 みるく…43

【和寒中学校学校祭意見発表大会】

(最優秀賞)

去年とは違う自分

福本 あずき…31

(名寄地方間税会 会長賞)

税のこれまでとこれから

濱田 恭介…46

(優秀賞)

自分はいつも怯えている

出戸 孝蓮…34

【随想】

ゆうさんの諸国漫遊記【五】

東町 西村 雄一

日向の国 宮崎県

平成十年十月一日、宇都宮から一年半で宮崎へ転勤となりました。昔は新婚旅行のメツカといわれ、暖かく明るいイメージの地への転勤でした。

(1) 南国の風景と巨人軍キャンプ

季節は秋でしたがイメージどおり南国の風景が広がっていました。椰子の木の並木など日本にもこんな所があるのかと驚いた記憶があります。県南部は日南海岸となっており、亜熱帯植物園・サボテン公園・鶴戸神宮・柱状節理を横にしたような鬼の洗濯岩、更に南下すると野生馬の生息地都井岬に着きます。日南海岸にはカメラを抱え何度も足を運びました。

平成十一年二月二十七日、宮崎県総合運動公園で行われている巨人軍宮崎キャンプ

を見学に行きました。長嶋監督以下投手では桑田・楨原・上原、野手では松井・二岡・後藤・村田・岡田・元木など常勝巨人軍全盛期の練習風景を間近で見ることができ感動いたしました。

(2) 白いベレー帽事件

平成十一年六月十二日、熊本の阿蘇山方面にドライブへ。快晴の下、広大な草千里の中を走り阿蘇山大火口を目指しました。妻にはバカチョンカメラを渡し好きな写真を撮るように言い、私は見晴らしの良い場所から火口の風景等をカメラに収め雄大な阿蘇山を楽しんでまいりました。

帰ってから現像に出した写真を眺めていたら、妻が撮った写真の中に私が大火口を覗いている後姿が写っており、白いベレー帽を被っているように見えました。私は帽子を被った記憶がなく妻に聞くと、気にはしていないと今まで言わなかったけれど、頭の後ろ髪が薄くなっており太陽の光に反射しているとのこと、直ぐに鏡の前で手鏡をかざして見ると左後頭部は地肌が見えるほど薄くなっておりました。自分では全く気付いておらずビックリの一言でした。

今五十七歳このまま進行すると七十歳を過ぎる頃にはツルツル・テカテカの頭になるのではとの思いがよがり落ち込んでしまいました。もしかしてこの写真は私の頭の現状を自覚させるための、妻の計画的犯行なのでは（考えすぎかなあ）。

しかし、その時救世主が現れたのです。大手製薬会社が日本で初の毛生え薬の発売をテレビで宣伝しており、それを見た私は素早く反応、近所の薬店に出向き購入の予約をいたしました。店主からはお客さんは当店の予約第一号ですと嬉しそうに言われましたが、よく見ると店主の頭はツルツルに禿げ上がっており大丈夫かなあと心配になりました。

一本五千五百円で年間十二本、二年間くらい使用しましたが薄い部分はフサフサにはならず効果を実感できないまま使用を止めました。しかしその後は薄い場所も含め頭はツルツルに禿げ上がることもなく、八十三歳の現在も「まあまあ」残っていること、大金をつぎ込んでいたので何らかの効果があつたと思うことにしております。

(3) 天岩戸・平家落人の里へ

県北部に高千穂峡があります。十一年九月初旬まだ残暑厳しい中、妻と神話の里、

高千穂町を訪れました。天照大神がお隠れになった「天岩戸」伝説の大洞窟も見てまいりました。高千穂神社では神楽舞も上演され観光客に人気です。

当日、宮崎県東臼杵郡椎葉村の平家落人の里も訪れました。言い伝えによりますと、源平合戦に破れた平家方はちりぢりに各地に逃れ、源氏方に知られぬよう山奥の未開の地を開拓しひっそりと隠遁生活を送っていましたが、源氏方に知られることとなり那須与一の弟大八郎に平家討伐の命令が下りました。しかし現地に到着した大八郎は人々が戦意もなく、静かに日々の暮らしをしているのを見て、鎌倉には平家を討伐したとうその報告をし、現地に留まり平家の人々を守ろうとします。

此処で平清盛の末裔に当たる鶴富姫と恋仲になりますが、鎌倉から帰還命令がでて二人の仲は引き裂かれます。このとき鶴富姫は身籠っており大八郎は自分の子であることの証の品を鶴富姫に渡し椎葉村を離れます。月が満ち女兒が誕生しました。成長した姫に婿を迎え那須姓を名のり、永らく栄えたと伝えられており、現在も茅葺き平屋の屋敷があり通称「鶴富屋敷」と呼ばれております。

宮崎市編終わり

備前の国 岡山県

平成十一年十月一日、一年で宮崎から岡山に転勤になりました。

岡山市には桃太郎伝説があり、駅前に出ると桃太郎の像が出迎えてくれます。駅近くの店では名物の「きび団子」も売っており、岡山と桃太郎は切っても切れない仲なのです。

岡山市中心部には日本三大名園の一つ後楽園があり何度も足を運びました。毎年五月第三日曜日には県内の女子中学生が茶摘み娘に扮する茶つみ祭があり大勢の観光客で賑わいます。

また例年七月には岡山市内を流れる旭川で花火大会が催され岡山城越しに大花火が打ち上がり、その迫力に圧倒されます。この一角には県立博物館・美術館のほかオリエント美術館などがあり、竹久夢二郷土美術館では夢二独特の乙女像を堪能できます。

(1) 雪舟

十一月下旬、総社市の宝福寺というお寺を訪ねました。室町時代の画僧「雪舟」が子どものころ修業を怠けたお仕置きで柱に縛られ、流した涙で足の指を使いねずみの絵を描きました、住職がねずみを追い払おうとしましたが絵と分かり、その才能に驚いて教徒のお寺（相国寺）に預けられたとの話が伝わっております。

（2）宮本武蔵

翌年一月下旬、戦国時代の剣豪宮本武蔵の故郷、英田郡大原町（当時）にある武蔵の里に行ってきました。青年期の武蔵像がシンボルになっており、武蔵資料館には五輪の書・木太刀・刀剣などのほか自画像や墨絵などの遺品や遺墨などが保存されており武蔵に出会うことができます。近くには武蔵の生家跡やJR智頭線には宮本武蔵駅もあります。

（3）備前焼

常滑焼や信楽焼などより古い窯といわれています。伝統を守り続けて一千年の間、窯の煙は途絶えたことが無いと言われております。備前陶友会があり主な窯元は二十を越えており、作家は二百名近くおられます。

素朴な手造りのぬくもりを感じる製品で、室町時代から茶道の流行もあり一躍有名になりましたが、実用品としても多くの人々に使われており、私も何点か求めてまいりました。

岡山市編 終わり

※ 漫遊記は完結ですが、実際の勤務地順序は名寄市・士別市・札幌市・東京都・横浜市・長野市・静岡市・高松市・宇都宮市・宮崎市・岡山市・東京都（再就職）となつています。

※ 感謝状 あなたは昭和四十二年春、私が二十五歳の時二十二歳で結婚しましたが、転勤族の私は住所が度々変わり、名寄市を出発点に士別市、札幌市と移り、昭和六十年四月から食糧庁勤務となったことから、神奈川県鎌倉市内の公務員宿舎に住むことになりました。

私は三年後には横浜事務所勤務となり、更に長野事務所、静岡事務所に転勤となりました。この間の単身赴任は五年あまりに及び、このため家庭を空けることが多く、難しい年頃の高校生の娘と中学生の息子の子育てや、近くの弁当店でパートとして働くなどのほか、趣味として町内のママさん卓球クラブや絵手紙教室に通うなど八面六臂の活躍をしております。

子供たちも大きくなり独立したことから、平成七年八月から高松市で二人だけの生活が始まりましたが、あなたにとっては誰一人知る人のいない地での新生活となりました。

住居は公務員宿舎ですが、どこの県でも繁華街から少し離れた所に建てられており、各省庁の職員が入居しておりますが、大半は単身赴任で日中はほとんど人影がありません。土地勘も無く一人で出歩くこともままならず、近くのスーパーに食料品を買いにいくだけの生活は寂しいものがあつたのではないかと思われまし、私は夜の付き合ひも多く週に二、三日は帰宅が遅くなりましたので、心細く不安を感じたことが多々あつたのではないかと思っております。

このような中で、私達の救いは共通の趣味の「詩吟」でした。何処にも日本詩吟学院の組織が有り、着任後直ぐに地元の詩吟愛好会に入れていただくなど、吟友として夫婦ともども歓迎され親しくお付き合いを頂き楽しく過ごすことができました。

共に暮らし始めてから五十八年の歳月が流れました。我が道を行く「亭主関白」の私を影日向なく支えてくれたことに感謝。 【ありがとう】

【随想】

本に親しむ

東 町 清水目 サダ子

私が本に親しむ様になったのは中学生の頃で、当時は教科書以外本など買ってもらえず、仲の良い友達から借りて読んだのが最初だった。

就職、結婚、出産と、本を読む機会も段々と少なくなっていく中、時間があれば好きな本を読む事も忘れない様に過ごして来ました。

夫は私よりも読書家で色々な本を読んではいましたが、最近は図書館に予約をして文藝春秋の月刊誌を借りて来て読んでいます。

文藝春秋の創刊者は菊池寛で、芥川賞、直木賞の創始者も菊池寛であると、以前作者紹介の本で知っていたので、早速彼の作品に興味をもち「恩讐の彼方に」をいっきに読み終えた。

この作品は国語や道德の教科書にも掲載され『青の洞門』の名前で良く知られてい

る。

作品には元になる話があり、それは江戸時代に諸国行脚の僧、禅海が現在の大分県中津市を訪れた時、命がけて難所を通る村人を見かね、三十年もかけて洞門を掘ったという逸話で、菊池寛はこの逸話に中川実ノ助の仇討のストーリーを加えて、人の背負う業の深さと、罪を許すことの意味を描いた作品になっている。本に親しむ事で、現代に生きる私達の胸をうつ作品に出会えるのも読書の良さかと思えます。

私も高齢の身となり、これからも老眼鏡の助けをかりて、一冊でも多くの本に親しんで行きたいと思えます。

【短歌】

己

中和明田しず香

夢の中娘の名前 大空に響き渡らせ 戻ってきたの
干ばつに落ちる雨音 聴きながら 自然は巨大 スプリンクラ―
来世では 真美子夫人になれるわよ 自分鼓舞して 今世を生きる
私にも 新しい顔 焼いとくれ ジャムおじさんに 伝えてほしい
友人の 遊び心に 癒される 心遊びで 自分に戻る
いつまでも 逃れられぬは 性と欲 どこまでいくか ホモサピエンス
白鳥は 何も持たずに 旅に出る 二枚の翼 己信じて
冬の朝 湯たんぽ抱いて 丸くなる このまま少し 時間よ止まれ

心明るく

東町 清水目 サダ子

お正月 心新たに 老夫婦 共に味わう おせち料理

朝一番 仏飯供え 読経す 心整え 無事を祈る

老夫婦 励ましながら この一年 身体老いても 心明るく

今年から 夫の菜園 引きついで 育てた西瓜 ポンポンたく

町報に 若かりし頃 掲載の 成人のことば なつかしく読む

陽を受けて 牡丹の花に いやされる 心さわやか 春の庭にて

我が運命 可もなく不可もなく 年が過ぎ 残された日々 心のままに

眠れない 長い夜の つぶやきも いっしか 短歌に うまれ変わって

ほうずきの 袋にひとつ 銀色の 雨のしずくが 光り輝く

しんしんと 雪降る道に 除雪車の 振動朝を さいて行くなり

過去の日々たち

西 和 池 澤 和 子

(北の雲短歌会)

八十という歳を迎えて振りむけば陽炎のような過去の日々たち
“好き・嫌い”花びらちぎりくりかえす遠い思い出春が恋しい
100点で病気の母を喜ばす小五の我に計画ありし
ひらがなにカタカナまじりで母からの手紙が届く遠い夏の日
年老いた母をそのつど悩ませるひとりひとりの決まった茶碗
訪ねれば少し寝ていけという姑は施設のベッドにかわいくなつて
働けることに感謝し宿の湯にゆったり浸る秋の夜長し
熊なのかぱっくり割れた蜂の巣が畑の木の枝にぶらさがりおり
耳遠くなつた頃からにこにことい人ぶつて夫は老いゆく
一年が終わろうとする雪の夕夫の熱爛少し頂く

プロ並みの

西 和 井 上 香代子

(北の雲短歌会)

プロ並みのケーキを焼いて巣立つ孫パティシエになる夢を目指して

お茶好きの夫のこだわり専用ポットに急須茶葉は特注

巣立ちゆく孫に頼まれ特製の煮込みハンバーグに腕を振るいぬ

料理好きの夫の見立ては手厳しい締め味の味つけよろしくどうぞ

子等呼びつきたての餅を食べさせずんだにくるみどれも美味しい

体調が未だ戻らず自家製の黒にんじくは効いてるのかな

待ちわびし恵みの雨に安堵する田畑も人も元気をもらおう

宵宮祭の最後の稚児舞に疲れを押して夫と見に行く

現役を退いた夫は生き生きと家庭菜園料理もこなす

早々とツリーを飾り子等を待つスモークチキンは夫の手作り

道程

三 笠 大 森 セツ子

(北の雲短歌会)

地下街をすいすい泳ぐおばあさん急ぐな老いのうきうき散歩
雪どけの庭に春呼ぶクロツカスまだかまだかと春待つ女

逃げ足の早さかなわぬ梅子さま祈りをこめてまたいらしてね

海からのおくりものにはぬめりありお茶まろやかにめかぶを食べる

ぬくもりが欲しくてふれる君の肩指の先からこぼれゆく春

今日もまたガールズトークに花が咲き笑みらんまんの食事会好き

地球儀が四角になった夢をみた急いでさがす北海道を

コスモスとゆれる私の恋ごころまだ枯れないでゆらゆらゆらら

延命はいらぬと子等に伝えた日八十路の春にふるさとの地で

欲望や名誉も捨てて素っ裸心もかるく長生きしそう

感謝

南 町 小 原 孟 庵

(北の雲短歌会)

鯉のぼり悠々として空高く吾の誕生日祝うがごとし

初恋の手紙を書いて返信まつ郵便屋さん見るたびポストへ

母親に「茶柱(くき)が立ったよ」テストの日送り出された朝よみがえる

姪っ子に豆播く時期はいつ頃と問われてすぐにカッコウ鳴けば

好き好きも還暦過ぎてお互いに朝からスマホに視線を送る

白内障の手術終わってよく見える自信ついたよ車の運転

道民の願いは同じとわれ思う大谷翔平フアイターズへと

宝くじもう買わないと思いつつ大きな夢をどこに収める

冬間近雪虫が目や鼻につきプレーの邪魔する今朝のパークゴルフ

北の雲の会に入って早二年詠(うた)続ける自分に感謝

歌生まむ思い

川 西 菊 地 美智子

(北の雲短歌会)

自分への労いしても良いよねと「へちもん」のカップ二つ買いたり
カーテンを開けても暗い朝なのにおきて起きての体内時計
新年の挨拶のよう来客はふわふわとしたうさぎさんなり
ほろ苦き恋の味するふきのとう土手に早々顔を見せいる
たつぷりと春の陽あびた黒土にたつぷりと播く小松菜の種
食べ頃のスイカ見極め一番に味見したのはさかしいカラス
ミスをして落ち込む我に「ドンマイ」と元気をくれし九歳の孫
友の言う心がしんとする感じ試してみたい落葉踏みしめ
助手席に乗った気分で見せくれし旅番組はニュージラードへ
歌生まむ思いで見入る初雪に時計の針はゆっくりとして

追憶

川 西 鈴 木 露 子

(北の雲短歌会)

年毎にわすれることが多くありあれもこれもと探す毎日
今年こそ来年こそと思いつつちやらんぽらんな人生を歩む
着やすさに好んで着ているブラウスもボロボロだけど捨てがたく思い
味付にこだわる夫も今は亡き塩分ひかえゆるゆる味に
冬の間たつぷり充電したけれど春の陽気にボケボケとして
ゆらゆらと立ち上がりゆく陽炎に田畑も春の香りがいっぱい
五月尽緑の風と青い空と言いたいけれど期待はずれに
塩分が5%と言うけれど梅は酸っぱい夏バテ予防
八十路きて落ち込まないで仕事する今日の温度は三〇度こえ
暑かった夏も暫しの別れですじわりじわりと雪の季節が

農の道

東丘 鷺見紀子

(北の雲短歌会)

「生きていれば九十五歳ね」声かける十三回忌の母の遺影に
人生に彩り添える趣味の会友達が増え活力も増す
七円や五円の切手が数多ありこれを使うも終活というか
同郷の人の葬儀の会場の前を通り過ぐ黙礼をして
こだわりのパンを求めて食したりほんのり甘く歯応えもあり
大臣は本気で食を守る気があるのか「米は買ったことない」と
土煙あげて耕すトラクターは陽炎の中に消えゆくごとく
聞いてほしいことがたくさんありますよそちらに行ったら聞いてね母さん
艶やかに時に雄々しく舞う友の隠れた魅力に酔えるひととき
農の道六十年経て苦も楽も財として夫は未だ現役

毛糸の手袋

札幌市 高数後 法子

(北の雲短歌会)

マヒ残る左手だけが冷たいと毛糸の手袋傍えに夫は
歩数計をお守りとしてリハビリに脚手術後の姉は励みぬ
落書きに何故(なん)で描いたと咎めればボールペン指す三歳の孫
幼子に若き父親くり返すこわくないよと齒科待合室
バット背負い自転車をこぐ少年の汗のにはほいも陽炎の中
漁獲量ふえしと並ぶ口先の黄色き秋刀魚を迷わずに買ふ
鮮やかな緑の餡のずんだ餅里の味よと作りし友は
子等の好きな二色卵は彩り良く手作りお節の引立て役に
過ぎし年を胸裏に秘めて満開の桜は樹齡二千年とふ
塩焼の鯿と菜の花からしあえストーブを背に春を味わう

神秘

三 笠 高 橋 範 明

(北の雲短歌会)

見上げれば計り知れない神秘あり星の瞬き夜空に広がる
アリーナの二階の窓に広がりぬ水墨画なるパノラマを見ゆ
母の影霞に揺れて消えゆきぬそつと面影胸にとどめて
鼻腔より香り抜けゆく山わさび炙った肉と共に食せり
山の端に揺れ行く影の蜃気楼いにしえ人の目も惑わさん
色褪せた手紙見つけて読み返すしみじみ沁みる親のぬくもり
政党の公約知れど顔見えぬ影が漂い見極められず
四キロのウォーキングで膝笑う運動不足を笑うしかなし
腰痛に耐えて歩める秋の道塩狩を越え夫婦岩まで
夫婦して同じ熱量胸に抱き一体感持つエスコンフィールド

堪忍袋

松岡竹ノ内ひかる

(北の雲短歌会)

イモ畑白い花咲く十勝野に陽炎たちてゆらりゆらりと

猛暑すぎ庭の草木の片すみに夏水仙の薄い桃色

好物件うまい話には裏があり親の心配尽きることなし

新店舗オープン祝いの花々と人々の列になごり雪が舞い

雨降りて萎れかかった紫陽花は色あざやかで美しくあり

ああ五月夫はパチンコ吾サウナ趣味は合わぬが今も寄り添い

昼下りひとり味わうティタイム茶葉の香りが馥郁と匂い

花曇り時おり会いて茶をすするそれだけのことが糧となりたり

縁ありて貴方と寄りそい半世紀そろそろ言おうか感謝の言葉

さまざまの事柄収め現在(いま)があり堪忍袋を繕いながら

春のかおり

西町土井一光

(北の雲短歌会)

お隣りの銀杏の木が倒されて窓の視界に青空を見る

この冬の寒さに耐えてふらふらと彩りあざやかナナカマドの実

寒い日は少し湯温をたかくして肩までつかりゆずの香をかぐ

降る雪もまた降る雪もすぐ消えて春のかおりの満ちる庭先

軒下の積雪に耐えし福寿草咲きて庭に春を連れくる

時々昭和の歌を口ずさみ湯舟で一人楽しみており

どの力士も勝ち越したくて息荒く気合を込めてまわしを叩く

寒風に吹かれた落葉は空を切り上下くるくる吾を抜き去る

日帰りのバスに揺られて雨の音(ね)を聞きながらゆく旅も格別

川縁の柳の枝が風に揺れ橋のたもとの鳥がサツと発つ

女性総理

三 笠 丹 羽 泰 子

(北の雲短歌会)

史上初の女性総理が誕生し笑顔浮かべて働いていくと

シルバーの一市三町の研修会に歌と踊りの芸人多し

この冬の厳しい寒さに耐えていく後期高齢者も負けずに生きる

私はね年金のみの収入で物価高にも怯まず暮らす

敬老の日皆からお祝いしてもらい元気に暮らしていこうと決める

初夏なのに暑い日が続き目がまわる老いには辛い陽炎現る

エジプトへ行く日が次第に迫りくる老いの我が身をふり払うごと

お茶会で抹茶頂き苦み残る和菓子の甘みでしなやかな味に

初夏や澁刺とした老いの暮しに気合をいれて今日も元気に

物価高どの品見ても高いまま貧富の差さえも開いてゆきぬ

猫

福原牧 あづさ

(北の雲短歌会)

目が覚めてまだ暗いなど思っても時計は起きろと怒鳴り続ける
口ずさむ三十一の文字たちを感じるままに並べ一首に
片付けは片っ端から押し入れへ収まりきらず雪崩れて振り出し
本日の業務はこれでおしまいと言わんばかりに燃える落陽
ああ憎い！いくらやっても取れやしない歯に挟まったトウキビの皮
重なって見える車に目を細め「ああ陽炎か」とアイスクャンデーを齧る
通夜のあと飲め食べ語れの片隅でアルバム捲り笑い合う夜
味噌汁を鍋で作って食べたいとインスタントを作る独身(ひとりみ)
カリカリの入った箱を前足でカリカリひっかき訴える猫
一日中ヒーターの前を動かない猫はいいなと温い毛を撫で

つつましく生きる日々

南町山中千代子

(北の雲短歌会)

八十路すぎ親より長生き感謝せり笑みたずさえて自由に生きる

集まると認知の話や介護などさけて通れぬ道の探求

妹の手造り器でティタイム総理候補の公約激し

庭の花寿命が果てるの知らねどもどちらが先か競争しよう

「物捨てよ」と常に云われど捨てられず戦前生まれのつましい性格

風にのりカッコウの声穏やかに豆を植えよとうながすように

母終り妻も終りて独り身の思いもよらぬ時間の余裕

ローソンのでかオニギリにかぶりつき体裁忘れ清清し朝

物価高少しの食材みなおして工夫と知恵のバランスに目覚め

人口減止める術なし我が町も未来の構想はかなき夢に

斎藤茂吉記念第32回中川町短歌フェスティバル

(佳作)

雨のふる雲を光が
つらぬいて地上にささり
虹が産まれる

和寒中学校二年 青木優晏

(佳作)

雪道を三籽歩くも
海豹は其処にはおらず
三籽返る

和寒中学校二年 合田真

第20回北海道小・中・高生短歌コンテスト

(優秀賞)

夏祭り 花火の空に 照らされて 君が合わせる 私の歩幅
和寒中学校二年 井上 栞那

(入選)

見上げると 夜空に咲いて 消える花 入れる花瓶は 君との記憶
和寒中学校二年 山口 莉生

(二次審査通過)

授業中 ぱつと目が合う その瞬間 やつぱり 私は 顔が赤らむ
和寒中学校二年 保土澤 舞音

【俳句】

鰯雲

三笠菅野彰夫

生きるとは 病むこと多し 吾亦紅
父の日や なって実感 しみじみと
鰯雲 ふるさと鯨 とれたかな
遥かなる 稚魚の旅路や 水温む
リラ冷えや 我が町灯す 資料館
年くれて 故郷思う 友の顔
牛追の 声透きとおる 秋の天
SLの 音にあいたい 星月夜
七夕や 笹折れるほど 夢がある
煩惱を 捨てて報恩講 寺参り

去年とはちがう自分

和寒中学校二年 福 本 あずき

皆さんは、去年の自分と比べて少しでも何か変わったことはありませんか？

私が変わったことは、「勉強に対する思い」です。私は、今年になって、勉強に火が付きました。

去年までの私は、単元テストがあってもあまり勉強をしていませんでした。テスト前日に提出物が終わっていないことに気づき、焦ってやることも多かったです。家では全然勉強をせずに授業前にワークを見るだけでテストを受けることもよくありました。このような感じで、去年までは勉強にあまり前向きではありませんでした。一年生の終わりに近づいていくと、少しずつこのままではまずいという焦りも出てきて、二年生になったら勉強しようかな、という思いになりました。ですが、二年生になるとそれだけではなく、他にも勉強を頑張りたいと思うきっかけがありました。

私が、二年生になってもっと勉強を頑張ろうと思ったきつかけは大きく分けて二つあります。一つ目は、志望高校に受かりたいという気持ちが強くなったからです。私は今、少し考えている将来の夢があります。それは、お菓子作り関係の仕事に就くことです。私は、お菓子作りが好きで、家でも良くしています。それが楽しく、そのような仕事をしたいと思っています。お菓子作りに関わるような高校は限られています。自分の中では、ほぼ一つに絞られていて、だからこそ、志望高校に受かりたいという気持ちが強くなりました。今の私では、簡単に合格できません。そのために、勉強を頑張りたいと思います。

二つ目は、勉強は将来の夢のためだけではなく、生きていくために必要だと知ったからです。去年までは、「高校に受かればいいや」という気持ちでした。でも、高校に受かるだけではなく、勉強は何に役立つのかと思い、インターネットで調べてみました。私が見たある学習塾のサイトには、『物事を分析する力で、困難にぶつかった時に解決策を見つげるため』『グループ学習で身につけたコミュニケーション能力で人間関係を保つため』『努力しつづける力で、何事もあきらめないでやり遂げるため』に勉

強は役立つ」と書いてありました。それを知り、もつと勉強をがんばりたいという気持ちが強まりました。

二年生になって、約四ヶ月経ちました。去年と比べて、単元テストの勉強をしつかりするようになり、その結果、以前よりも高い点数を取れるようになりました。今年、中学二年生になって、授業内容が去年よりも全体的に難しくなり、話を聞いていてもわからないことが増えたのですが、そのままにするのではなく、自分から聞いたり、苦手な教科にも向き合ったりすることが、今の私の頑張ることだと思えます。今年成長したことを継続できるよう、少しずつ勉強して、目標に近づけるようにがんばります。

私は今回、最初はうまくいかなかったてもしっかりと変わろうとすることが自分の成長につながることを知りました。これから先も勉強だけではなく、日々の生活に生かしていきたいです。

自分はいつも怯えている

和寒中学校三年 出戸 孝蓮

自分は、心の中でいつも怯えている。

何に怯えているのか？ 自分でもよくわからなかった。だが、最近、それについてよく考えるようになった。考えた中で、真っ先に浮かんだのは、友達に嫌われるのが怖いのか。将来、どうなっていくか不安なのか。それとも、自分の行動に自信がないからか。

いろいろと考えた結果、きつと自分が一番怖いのは、「自分の本当の気持ちを知られること」なんだと思う。

友達に弱いやつだと思われたくない。だから、強がってみせる。けれど本当は「怖い」とか「自信がない」そんな気持ちを、ふとした時に知られてしまったらと思った

り、不安になったり、落ち込んだりする。でもこんなことは誰にも話せない。学校は楽しいし、普通に笑っている。でも、それは本当の自分なのかなと感じる。そういう気持ちを誰かにわかってほしいと思っている自分もいる。

それでもやっぱり誰にも言えない。言ったら引かれるんじゃないかと思うし、関係が気まづくなるのが怖い。だから自分は何も言わずに気持ちを隠して生きている。

でも自分は思う。「人ってたぶん、みんな何かを隠して生きているんじゃないか。強く見えるやつも、明るく見えるやつも、きつとどこかで不安とか弱さを感じているはずだ。」だから自分は、みんながそれを自覚して、自分の気持ちに正直になってもいいんじゃないかと感じる。

それでも、自分の気持ちを正直に話すのって、やっぱりすごく難しい。どこまで話せばいいのかわからない。もし相手がちゃんと聞いてくれなかったらと考えると、それだけで話せなくなる。でも、誰かに本音を少しでも出せたら、たぶん前より気持ちが軽くなると思う。いきなり全部をさらけ出すのは無理でも、少しずつでも言えるようになりたい。

そして、誰かが弱さを見せてくれた時には、ちゃんと受け止められるやつになりたい。もし、周りの誰かが自分と同じように、心のどこかで何かに怯えているようなら、「わかるよ」って言える人間になりたい。自分のことを隠さずに居られる場所があるってすごく大事なことだと思う。

だから自分は、まず自分の本当の気持ちに正直に、ごまかさずに向き合っていきたい。そして、自分の弱さも受け入れながら、他人の弱さにも寄り添い、少しずつでも前に進んでいきたい。

動物と人間の付き合い方

和寒中学校一年 今北 悠太

皆さんは、人間が好きですか？

最近、ニュースや本などを見ていて、ふと思うことがあります。「人間は、動物とうまく付き合えているのだろうか？」と。

僕は、人間が好きではありません。その理由は、「人間は動物を殺したり、絶滅に追い込んだりしていると思っているから」です。

例えば、最近よく登山中の人や新聞配達中の人クマに襲われるといった事件を耳にします。そうしたクマは、射殺される事があります。このニュースを見るたびにどうしても引つかかる点があります。「今まで人を殺したクマの数と人が殺したクマの数が、あまりにも不公平ではないかということ」です。無論、クマが人を襲うことはあります。しかし、今まで人が殺してきたクマの数の方が圧倒的に多いのです。更に、クマ

が絶滅すると、山の生態系が崩れてしまい、植物の種子を散布することができなくなってしまうということにもなりかねません。あまりにも異常に人を襲ったり、農業被害が出たりと、本当にどうしてもやむを得ないとき以外は、射殺する必要はないと僕は思います。

次に、外来種についてです。外来種とは、人間が違う場所からもってきた動植物の事で、日本には、アライグマやアメリカザリガニなどがいます。外来種がいると、農業や生態系などに悪い影響が出るので、駆除する必要があります。でも実際には、外来種ではなく人間が悪いのです。そのため、少し難しいかもしれませんが、捕獲したあと死ぬまで大切に飼う施設はできないかと思えます。そもそもペットは死ぬまで飼うのが飼い主の責任です。野生に逃がすのは、様々な悪影響が生じるので、絶対にペットは逃がさないでください。

最後に、ホッキョクグマについてです。今、地球温暖化でホッキョクグマは大きく数を減らしています。ホッキョクグマが絶滅すると、餌のアザラシなどが異常に増え、北極圏の生態系が崩れるだけでなく、先住民の生活・文化に大きな影響が出る可能性

もあります。

僕は人間が好きではないですが、人間は高度な知能をもっているのです、動物と人間が共存するにはどうしたらいいのかを考え、実行することができる生き物だとも思っています。その証拠に、人間は動物を殺すだけではなく、保護したり助けたりすることもあります。人間は、興味深くて何か不思議な生き物だと僕は思います。

そんな人間が動物とうまく付き合うためにはどうしたらいいのか？「節電を徹底する」「家電を買う時に省エネの物を選ぶ」「野生動物にエサをあげずに人に慣れさせないようにする」そして何より「愛をもって動物に接する」これらのことに一人でも多くの人が取り組む事で、動物と人間が共存できる日が近づくのだと思います。

僕はこれからも動物と人間が共存できる日が近づくように努力していきたいです。

【税の作文 名寄地方納税貯蓄組合連合会会長賞】

生活を支える大切な仕組み

和寒中学校三年 渡 邊 璃 々

今、私たちが歩いている道路や毎日通っている学校、風邪をひいたときに行く病院など、普段の生活の中で当たり前のように感じていることは、すべて税金によって支えられています。歩道が整備され、学校に安心して通うことができ、病院で治療を受けられていること。こうした「当たり前」の裏には、私たちの暮らしを守るために使われている税金の存在があります。税金は、公共サービスの提供や社会を支えるために必要な費用をまかなうために使われています。では、なぜ税金が必要なのでしょうか。それは、道路や学校、病院などの公共の施設やサービスは、私たち一人ひとりが個別に用意することができないからです。みんなが安心して生活できる社会をつくるために、国や地域みんなが少しずつお金を出し合い、必要なものを整えたり、困っている人を助けたりしているのです。税金があることで、自然災害や病気などの時にも支

援ができ、経済的に困っている人や教育を受ける機会に恵まれない人たちへの助けにも繋がっています。このよう税金は誰もが安心して暮らせる公平で安全な社会を守る大切な仕組みなのです。たとえば、二十二十年から世界に大きな影響を与えた新型コロナウイルス対策でも、消毒液やマスクの配布、医療支援などに税金が活用され、多くの人が助けられました。私たちの暮らしは、税金という国民や地域の人々の協力によつて成り立っているのだと、改めて感じています。私自身、税金のありがたさを実感した体験があります。一つは、学校にエアコンが設置されたことです。以前は夏になると教室がとても暑く、勉強に集中するのが大変でした。しかし、エアコンが設置されてからは快適な環境で授業を受けることができ、学習に集中できるようになりました。後に、それが税金によつて実現されたこと知り、税金が身近なところで使われていることに驚きました。また、中学校の修学旅行で台湾を訪れたとき、町から補助金で参加費の負担が軽くなりました。海外で異文化に触れたり、友達と過ごした時間は大切な思い出になりました。こうした機会が得られたのも税金による支えがあったからこそだと思います。

私たち中学生はまだ直接税金を納めることは少ないですが、お菓子を買ったときに支払う消費税などを通して、すでに社会の一員として税金に関わっています。将来は働いて所得税や住民税を収めることになりますが、税金を「取られるもの」と考えるのではなく、「誰かを支える大切な仕組み」として前向きに向き合っていきたいです。これからも日常の「当たり前」に感謝しながら、税金がどのように使われているかに関心を持ち、社会の一員としての自覚を持って生活していきたいです。

【税の作文 名寄地方納税貯蓄組合連合会優秀賞】

もし、税金が無くなったら

和寒中学校三年 遠山 みるく

私たちが毎日生活している社会には、さまざまな公共サービスがあります。学校、病院、警察、消防、道路の整備など、どれも私達が安心安全に暮らすために必要なものです。でも、もし税金という存在が無くなってしまった社会について考えてみたいと思います。

まず、税金が無くなったら、私達の生活はどう変わるのでしょうか。今、私達は税金を払うことで学校の運営や医療、公共交通機関、道路の整備などに必要な資金を提供しています。もし税金が無くなったら、これらの公共サービスを提供するための資金が無くなってしまいます。例えば、私達が通っている学校の教育費、和寒町では検定の受験費なども税金から払われていますが、税金が無くなると、これらの資金がなくなり、学校に行けない子供が増えたり、年金の一部も税金から払われているので、少

子高齢化が進む今の時代に税金が無くなってしまったら、もう仕事をしていない高齢者に年金が払われなくなり、高齢者の生活が苦しくなります。もしこうなったら、十分な教育も受けられず、教育費を稼ぐために働く子供や、生活費を稼ぐために働く高齢者の多い世の中になってしまいます。

さらに、病院や診療所も、税金を使って医療サービスを提供していますが、税金が無くなると、医療が十分に受けられなくなり、病気や怪我を治療するのも有料化される可能性があります。また、警察や消防の活動も税金によって支えられています。警察は犯罪を防いだり、私達の安全を守り、消防隊は火事や災害時に命を守ってくれます。大切な存在ですが、もし税金が無くなったら、警察官の給料や警察署の運営費用が足りなくなり、警察の活動が減ったり、消防署が十分に機能しなくなります。もしくは、交番に助けを求めたり、火事で消火を依頼するのも全て有料になり、救える命も救えなくなるかもしれません。

税金が無くなった場合、困っている人々への支援が難しくなったり、お金が無いと学校や病院に行けない人が増えるかもしれません。こんな社会では、助け合いの精神

が薄れ、貧富の差が大きくなり、社会全体が不安定になる恐れがあります。また、地方自治体などが行う公共事業も難しくなり、道路の整備や公園の管理、環境保護活動なども税金が無くなると出来なくなり、生活環境が悪化し、住みにくい社会になってしまいかもれません。

税金が無くなることで、一時的にお金を使わなくて済むと感じるかもしれませんが、長い目で見れば、社会への影響はとても大きいです。税金が無くなることは、社会にとって非常に不安定で、困難な状況を生み出すことになると思います。

私は、税金をしっかりと納めることが、私達の当たり前を生み、社会を支える大切な役割だと感じました。私達が税金の役割を理解し、無駄に使われないようにする事が、よりよい社会を作るための一歩だと思います。

【税の作文 名寄地方間税会会長賞】

税のこれまでとこれから

和寒中学校三年 濱 田 恭 介

中学三年生になって数ヶ月が経ち、一学期の終わりが見えてきた夏のある日、時間割に見覚えのない授業があった。その授業の名前は「租税教室」。先生の説明によると、自分の住む町から少し離れたところにあるここより大きな町から役所の職員の方がやってきて、税金の種類や仕組み、使い方などについて特別に授業をしてくれるらしい。それに先立って、先生は税に関することが書かれたいくつかの資料を生徒に配布した。その中の一つに目を引くものがあった。日本の税の歴史だ。その資料を読んでいくうちに、私は税を今までとまったく違う視点で見えるようになった。

資料には、時代ごとの税の名前や仕組みが書かれていた。聞き馴染みがあるのは、飛鳥時代の租、庸、調。平安時代から始まり、その後江戸時代まで続いた制度である年貢。明治時代からは年貢に代わり地租。そして戦後に交付された日本国憲法で、三大

義務の一つとして設けられた納税の義務。

このように、税は形を少しずつ変えながら人類とともに歴史を歩んできたのだ。そして、それは人々の暮らしを支え続け、ときに戦争のために利用され、ときに争いの種となった。

このことを知って、私は税というのは当時の国内情勢の影響を非常に強く受けるものだと考えるようになった。例えば、戦争になれば大量のお金が必要になるため、税金が上がることもある。日露戦争や太平洋戦争はまさにそうだろう。逆に言えば、当時の税の仕組みを知ることですべての時代の国がどのような様子であったかも推測できるだろう。

こうして私は自分なりの税に対する考え方を持つことができた。しかし、私はここで一つの疑問を抱いた。

「未来の税はどうなっていくんだろう？」

税金が上がっていくかどうかというよりは、これからの社会において税はどのような存在になるのか。そういった疑問が浮かんできた。これについて考えているうちに、

私は先程の考えとは真逆の結論に至った。

税はもう、時代によって変化するものではなく、むしろその逆。税が世界を動かしていくのではないか。私がこの結論に至った最大の理由、それが二〇二五年の四月、アメリカが発表した新たな関税の計画だ。これは世界各国に大きな衝撃を与え、国同士の関係に変化がうまれたこともあっただろう。関税が直接的原因にはならなくとも、このようなことが続き、国同士の関係が悪化すれば、最悪の事態も起こり得るかもしれない。

このように、税は今まさに世界を動かしているのだ。だからこそ、私達は税について知らなければならぬ。税を知ることが、その国を知ることにつながるのだ。私達は今までとは違う時代を迎えている。税を知ることが、この国を支え、未来を生きるカギなのだ。

こうして得た新たな税への思いを胸に秘め、私は席に座り、授業開始の号令を待っていた。

編集余滴

今年も多くの方々からご寄稿いただき、編集者一同喜んでおります。

町内の幅広い世代・立場の方々が、文字を通じて心の交流を図り、この「文芸和寒」が地域文芸活動のさらなる発展に寄与することを心より願っております。

なお、編集段階で加筆、訂正、割愛させていただきますものもごさいますので、悪しからずご了承ください。